

古川知明

(埋蔵文化財センター専門学芸員)

1 富山城の歴史

富山城は、旧神通川（現松川）と鮠川の合流点に立地する。富山城築城は越中守護代神保長職によるもので、その築城年代は久保尚文氏による天文12（1543）年説が最有力である。天正6（1578）年神保長住が富山城に入り、その後佐々成政が居城した。天正13年成政を降した豊臣秀吉によって城は破脚され、中世富山城は終焉する。慶長2（1597）年に前田利長が入り、以後本格的に城・城下の整備に着手したとされている。

慶長2（1597）年利長はいったん入城するが2年で金沢へ戻り、慶長10（1605）年再び居城する。慶長2～4年の間に城の整備を行なったという記録は認められないが、建物整備等はすでに始めていると考えられる。慶長10年には、御屋形修造、縄張普請の間数・石の積りを開始し、また県境の飛騨横山へ修築用材（赤松材）の手配を始めており、城・城下の本格整備に着手したことがわかる。その後用材は能登羽喰山（羽咋市）にも求められ、越前・若狭大工が手配され進められた。しかし城と城下町のほとんどは慶長14年大火で灰燼に帰した。

本稿では慶長10年から開始されたと見られる石垣築造の概要と、築石にみられる刻印について、調査途中ではあるが最新調査成果を示すものである。

2 石垣の現状

江戸期各絵図でも示されているが、石垣が設けられたのは、南側の本丸大手枡形虎口、東側の本丸搦手枡形虎口、二の丸西側枡形虎口の3ヶ所であり、その他の部分はすべて板塀を設けた土居（土塁）であった。石垣上にはかつて櫓等が存在したが、大火などで江戸末には存在していなかったとみられる。現在、二の丸西側枡形虎口石垣は存在せず、富山産業大博覧会に伴う昭和28年の工事で、石垣の一部積み替え、模造天守の建設、土塁部分へ新たに石垣設置などにより、江戸期の石垣は本丸大手枡形を除いて大きく変えられているとみられる。大手枡形石垣には大手道に沿って2mを超える巨石「鏡石」を数個配置する。

3 石垣の築造について

現存する石垣が最初に築造された年代は必ずしも明確でないが、慶長10年に縄張普請の間数・石の積りをさせており、この石が石垣築造のための石材のことをさすとみられる。したがって初期石垣は慶長10年以降に調達・築造されたものとみられる。鏡石の存在も慶長後期の特色と位置づけられ、このことを裏付けている。

石垣で最も遺存状況が良好なのは大手枡形の南面する石垣である。枡形面には合坂・雁木をもつ。築石は、合坂間の石垣下部では割面にノミ加工を施さない、あるいは一部の片面加工を行う大型の石を用い、石垣上部では筋ノミ加工による平面作出が顕著な小型の石が多く用いられている。前者は火災による石表面の剥離が著しく、今後より詳細な観察が必要である。金沢城における石垣と比較すると、前者は慶長後期（1605～1614）、後者は元和～寛永期（1615～1644）頃の加工技術に類似する。富山城では元和・寛永期の石垣修築記録はなく、万治2（1659）年の大地震の修復として万治3～寛文元（1661）年にかけて修築したという記録があり、この年代に大幅に築石を積み替えた可能性を考えたい。

その後の藩政期における孕みの修復や積直しは、金沢城における穴太衆に代表される専門集団を擁する財政的余裕はほとんどなかったため、在地の石工が既存の築石を再利用して実施したとみられる。その結果として禁じ手とされる笑積が随所に発生、また間隙も多

く見られるようになり、石垣構造の弱体化が促進されたとみられる。この時期金沢城では主要施設土台等で一部切石を採用し始めるが、富山城では最後まで切石積みが採用されることはなく、また時期は不明だが、円礫をそのまま築石として使用している部分もあり、修復痕からみてこれらの状況を裏付けるものと推定する。

鏡石は面の一部に大型の筋彫を施すものがある。これは築造初期の面整形ともみられるが、今のところ幾度かの積直しの際微細な面合せをノミ加工によって調整したものと考えておきたい。

4 既往の石垣調査・研究

富山城石垣に関する研究は、これまで刻印に関することが主であった。1966年の塩照夫氏による刻印調査（塩 1994）が唯一全体的に行なわれたものであり、これ以外に大手枡形隅石にある星形の刻印を発見した藤田富士夫氏の報告がある。このほか刻印は高瀬保氏や京田良志氏が調査されたことがあると聞くが、報告は未完のままである。鏡石については、京田氏により 1 個の大石を 4 枚に割って使用しているという重要な指摘がある（京田 1997）。

5 刻印について

塩照夫氏の調査では 10 種 22 個が報告された（塩前掲）。現在測量途中ではあるが、2005 年 1 月末現在確認した刻印は 87 種 254 個（表 1）である。「十」「口」「コ」「◇」「C」「卍」「田」の順に多い。刻印は割面に認められるもの、礫自然面に認められるものがあり、前者が多い。割面刻印には、割った後ノミ加工を行なって整えた後に刻まれるものが多い。刻印は 1 面に 1 個のもの、異種 2～3 個を施すものがある。刻印全体としては小ぶりであり、大きめの築石割面に小さな「十」を刻むものが多く認められ、これらは慶長期段階とみられる。細く深く印刻するものと、幅広で浅く印刻する 2 種が存在するが、後者は花崗岩の石表面が帯火による剥落で劣化した結果であるとみられるほか、一部整形痕である可能性のものを含んでおり、特に「C」字形のものは今後判断に注意を要する。

刻印が確認しにくかった理由としては、(a) 積直しにより刻印が石垣裏側へ隠れた、(b) 数度の大火で築石表面が剥落した、(c) 積直しの際の面合せなど二次的な表面のノミ整形により除去された、(d) 刻印が浅く読み取りが困難であった、等の要因が考えられる。なお、利長が慶長 15 年に築造した高岡城の土橋石垣においては、相当数の刻印がみられており

（西井 2004 ほか）、富山城と共通する刻印は 10 種に及ぶ。高岡城では約 3 割に花崗岩を使用しており、早月川産と推定されている。肉眼観察では築石の多くが富山城と類似した様相を示しており、石材獲得の共通性が看過される。

金沢城では田端實作氏による慶長後期から寛永期の刻印の調査が行なわれ、592 種 1441

□基調 (16 種 62 個)											
	15	7	1	1	2	1	2	2	2	1	1
○基調 (17 種 49 個)											
	9	1	1	4	1	2	1	2	1	1	1
△基調 (13 種 28 個)											
	8	1	1	7	1	1	1	2	1	2	1
線基調 (32 種 93 個)											
	5	2	33	15	1	3	1	1	1	1	2
											
	2	1	1	1	1	2	4	1	1	1	1
その他 (9 種 29 個)											
	12	1	6	1	1	1	4	1	1	1	1

表 1 富山城石垣にみる刻印（2005 年 3 月現在）

個が確認されている。今回調査と分類基準が異なるが、個別的には富山城と 30 種が共通する。先述の富山城で多数所在する刻印は、ほとんどが金沢城においても認められている。

6 丁場について

富山城石垣の築石は、約 70%が花崗岩、残りが安山岩である。それらは大型の自然石を 2～4 ツ割にしたものであり、その石材はほとんどが河川転石である。石垣は度々の大火で変質しているが、肉眼観察では花崗岩は早月川を中心とし片貝川・黒部川、安山岩は常願寺川が主産出地である可能性が高い。各河川では砂防ダムなどの設置により大型礫の獲得可能流域が当時と異なると推定されるが、石材として使用可能な 80cm を超える転石は現在でも中流域で十分獲得できるが、隅石や鏡石の獲得は上流域まで遡る必要があろう。常願寺川では陸路を経て鮎川の利用、早月川では陸路を経て舟運を利用し、海岸を経由して岩瀬から神通川を遡上するルートが想定できる。

現在帯磁率測定・顕微鏡観察などの理科学分析を行い、河川流域産地同定を試みている（富山大学酒井英男研究室と共同研究中）。

7 石工について

越中立山古文書に、初代藩主前田利次の正保年間（1644-1648）、芦峯寺の橋台石垣築造工事に際し、金沢から「石切穴生」工人を呼び寄せている（木倉編 1982）。利次は加賀藩 3 代藩主前田利常の二子であり、宗藩との血縁の強いつながりの中で技術者の招請を行えたものとみられる。橋台とはおそらく布橋の橋台と推定されるが、現在は残っていないとみられる。このように富山藩における金沢の穴生衆の関与は利次段階では確実であることから、慶長期に利長が整備した富山城初期石垣の築造においても金沢穴生衆が深く関わったことは疑いのないことであろう。

本稿の作成にあたり、西井龍儀氏、富田和気夫氏、宮田進一氏、上野光氏の有益なご教示を得た。

参考文献

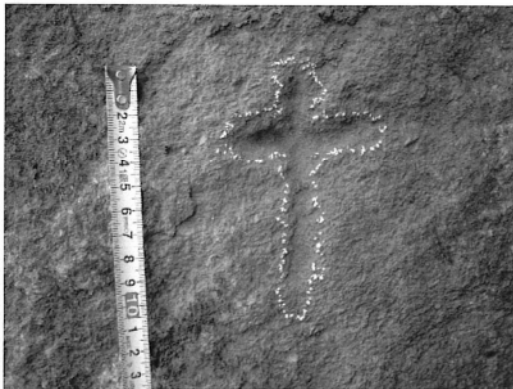
- 加藤達行 2003 「富山城東出丸について」『富山市の遺跡物語』No. 4 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
加藤達行 2004 「富山城の破却について」『富山市の遺跡物語』No. 5 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
加藤達行・古川知明 2004 「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」『富山史壇』第 142・143 合併号 越中史壇会
金森久一 1935 『富山城の起源』
木倉豊信 1982 『越中立山古文書』国書刊行会
京田良志 1997 『続石の表情』桂書房
佐伯哲也 2004 「中世富山城について」『富山城跡試掘確認調査報告書』富山市教育委員会
塩 照夫 1972 『富山県の歴史 越中の古城』北国出版社
塩 照夫 1994 『北国街道の城』北国新聞社
高岡工芸高等学校地理歴史クラブ 1964 『足跡』68
高岡 徹 1980 「富山城」『日本城郭体系』7 新人物往来社
高岡 徹 1987 「第三節 神保氏再興と富山築城」『富山市史 通史上巻』
高瀬 保 1975 「加賀藩初期の飛州北方材調達について」『地方史研究叢書 4 近世越中の社会経済構造』名著出版
高瀬 保 1975-1977 「近世の富山城下町(1)～(4)」『富山史壇』第 61-66 号 越中史壇会
田端寶作 1976 『金沢城石垣刻印調査報告書』
富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2004 『平成 16 年度富山城跡現地説明会資料』
富山市郷土博物館 1999 『特別展 富山城の歴史展』
西井龍儀 2001 「富山県産瓦の変遷」『北陸の瓦の歩み』社団法人日本セラムックス協会北陸支部
西井龍儀 2004 「虹が島と高岡城の石垣」『富山市日本海文化研究所紀要』第 17 号
深井基三 1995 『近世の地方都市と町人』吉川弘文館
深井基三 1995 「要害に囲まれた富山城下」『城下町古地図散歩 1 金沢・北陸の城下町』平凡社
古川知明 2004 「富山城本丸採集の瓦について」『富山市の遺跡物語』No. 5 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
古川知明 2004 「富山城跡の調査から一中世富山城を中心に」『北陸都市史学会第 27 回大会研究発表要旨』



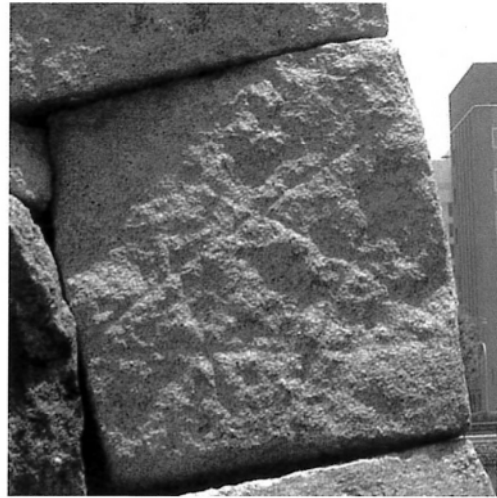
←
卍形
の
刻
印



↑ 2 種類
の
刻
印



↑ 富山城で最も多い十字形の刻印
大手石垣の星形刻印→



研究余話Ⅸ 富山市内最新の出土漆器について

近年、富山市内の沖積平野部の発掘調査で鎌倉時代から江戸時代の集落や城館遺跡で多くの漆器製品が出土した。この程、国内の遺跡出土の漆器に詳しい漆器文化財科学研究所の四柳嘉章所長にこれらの遺跡から出土した漆器について、多くのご教示をいただきましたので、含めてご報告させていただきます。

●水橋金広・中馬場遺跡（鎌倉～戦国時代・12世紀末～16世紀）

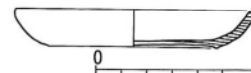
遺跡は南北約 500m の範囲に、大溝で区画された屋敷地に掘立柱建物や井戸、堅穴状遺構などが配置される館が形成されています。遺跡の北部～中央部は戦国～江戸時代前期を中心とした時期の遺構や遺物が検出されています。遺跡の南部は鎌倉～室町時代までの遺構や遺物が検出され、やや古い時期に館跡が形成されていました。

①12世紀末～13世紀初頭（鎌倉時代初期）の漆器
無紋の皿が出土しています。底部に高台が付かず、露胎（下地を塗っていたがはげた状態のもの）となっているのが特徴です。

②13世紀（鎌倉時代）の漆器 「桐+竹」の文



1



0 10cm



2